

---

# 赤い道化師の箱

miora

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤い道化師の箱

### 【Nコード】

N2477Z

### 【作者名】

m i o r a

### 【あらすじ】

時は貴族が栄える時代。ロンドンから少し離れた田舎のミルフィではミシエル・カルセルの父、ルーカスが謎の死を遂げた。そしてミシエルの前で起きた悲劇。この二つの関係とは・・・？  
父の死因とは？ミシエルの運命は？

人は誰でも、一つの仮面を持っている。それはまるで、表面とは裏腹に腹の中で嘲笑う道化師。

ステージへと最後に残るのは果たしてだれなのか？

そのステージを操っている道化師とは？

今、今世紀最大のサーカスが幕を開ける・・・。

「ご主人様、此処にいたのですか」

穏やかな日差しが差しかかる、今日この頃。

木の上でのんびりと読書をしているミシエル・カルセルに向かつてセイン・ファルータは言った。ミシエルは金髪の短い髪をいじりながら、頷いた。

「うん。継承式の後片付け、御苦労さま」

此処はロンドンの都心から少し離れた、ミルフィという田舎。そして、ひと際大きい丘の上にある屋敷の亡き主、ルーカス・セルカール。今日は、ミシエルはルーカスが亡くなった為に少し、早い継承式を終えたのだった。

「いえ。それより、マロ様が怒っていましたよ。継承式の終わつた後は皆様でパーティーだと言うのに、主がいないとは何事だと」「パーティーか。ただ、親戚や貴族たちに挨拶するだけの退屈な催しさ。それだったら、僕は此処で静かに本を読んでいたよ」

「それに、その調子では主としての自覚が足りないとも仰っていましたよ」

ミシエルは思わず吹き出してしまった。あの怒りん棒で厳しいマロ一なら、言いそうだと。

(・・・主としての自覚、ね)

あまり実感が湧かない、というより、まだ父が亡くなった事が信じられない。

ちょうど自分の十四歳の誕生日だった、あの嘆かわしい報告が自分の耳に届くのは。

「・・・父はどうして、こんなにも早く逝ってしまったんだろうね」  
木からタン、と猫のように身軽に飛び降りた。

「・・・」

セインは何も言えずにただ、ミシエルを見つめた。

「人生つて言うのは何が起こるか分からない」

不意に何かを思い起こしたようにセインに言った。

「父の死因はまだ、分からない？」

「はい。ミゴール警察署は未だ、調べてはいますが……」

「どうなんだろうね。何だか父の死因はこの先、何をやっても分からないと思うよ」

「例の直感ですか？」

「ふふ。良く当たるんだ、僕の直感はね」

「知っていますよ。何年間、貴方のお傍に仕えていると思っているんですか？」

セインは乱れていたミシエルの髪を直しながら、笑った。

「……ところで、良かったの？本当は僕の弟になる筈だったのに、使用人になんかになっちゃって」

「そんな滅相もない。貴方に救われて、どれだけ人生が変わったか。今でも感謝しきれないほどです」

「大げさだなあ、セインは」

はははと笑って、屋敷の窓から見えるパーティーの準備をしている使用人たちを見ていた。

そこにお目付役のマローが通りかかり、あっさりとミシエルは見つかつてしまった。

「まあ！此処にいらしたのですか、ミシエル様！さあさ、もう、伯爵や貴夫人達がお集まりになられてますよ。着替えてください」

「あーあ。見つかつちゃった。分かったよ、マロー。分かったから、そんなに怒鳴らないで」

やれやれと言う風に仕方なしにマロ について行く。その後をセインも付いてきた。

セインは昔からこうだった。少し、気が弱くて、周りになじめずにいた。

元々、孤児院にいたセインはそこでも、周りになじんでいる様子は無かった。そこで、父親に付いてきたミシエルはセインを自分の弟

にする事にした。

（最初のうちは大変だったな……。なかなか、僕の事を信じてもらえなくて）

昔の事を思い起こすと、少し苦笑してしまう。

なかなか、良い物ではないのだから……。

その時、この後何か良くない事が起こると、不意に思った。

（あー……。こういう直感、良く当たるんだよね。何だろう。この胸騒ぎは。とにかく、あまりいい物じゃないな）

早くそんな事は忘れてしまおうと急いで、自分の部屋へと入った。

部屋にはいると着替える物が既に、ベッドの上に置かれた。外を見ると、既に暗くなっており、空には星が瞬いていた。

「どうしました？先ほど、何か険しい顔をなさっていましたか」  
着替えを持った、セインが言った

「あれ？そうなの？全然気付かなかった」

笑いながら、セインに「リボン、変じゃない？」と聞いた。セインは無言で、リボンを直した。恐らく、彼は気付いているのだろう。

自分が何か嫌な事でも、思っていたのだと。

「そうだ。クラリスは来るのかな？」

「……。確か、レオン様と一緒にご出席なさると伺っております」

「レオン？ああ、クラリスの新しい使用人が……。でも、嫌だな。クラリスはどうも好きになれない」

「出来ましたよ」

苦笑いをしたセインが最後に髪を整えた。

「さて、行くか」

ミシエルはパーティーへと足を進めた。

「ミシエル様、この度は誠におめでとございます」

「こちらこそ、来てくださって有り難うございます」

手を握り、世間話に花を咲かす。これが社交界での常識。何とも、つまらなくて、くだらない催しだと、つくづく思う。

「こちらはバーキッド夫人。代々伝わる、ニコル家の五代目でおられます」

紹介されたバーキッド夫人は少し、歳を召された方だった。しかし、彼女は実に優雅に、そして穏やかな口調で挨拶をしてきた。

「こんばんは。随分と可愛らしい主人でなさるのね。私はバーキッド・ニコル。愛称はバークと呼んでくださいな」

「僕はミシエル・セルカールと言います。気軽にミシエルと呼んで頂いて結構です、バーク夫人」

「では、ミシエルと呼ばせてもらうわ。・・・お父様の事、本当に残念に思うわ。非常に寛大なお方だったのに」

「父の事をそんな風に思ってくださいって、有り難うございます」

「ふふ。礼儀正しいのね。あら？貴方は？」

セインは自分の方に視線を向けられて、とても戸惑っていた。

「ぼ、僕はセイン・ファルータです。ミシエル様の専属使用人でございます」

慌ててお辞儀をして、テーブルの角に頭をぶつけた。

「ふふふ。楽しい方ね。あら、もうこんな時間。ごめんなさいね。

折角来たのだけれど、孫の誕生日があるの。また今度、ミルクテイでも飲んで、ゆっくりお話をしましょう」

「はい、ぜひ」

「ああ。それともう一つ」

「はい？」

バーク夫人は耳に顔を寄せて、小さな声で言った。

「社交パーティーっていうのは退屈ね。そう思わない？」

にっこりと笑った。ミシエルもつられて、にっこりと笑う。

「そうですね。その通りです」

バーク夫人は頷いて、使用人らしき人物と、一緒に広間を出て行った。

その時、セインはミシエルの方をポン、と叩いて指をさした。

「人に指を指すのは失礼じゃないのかい？」

パーマのかかった水色の髪の毛の男がにやにやとこちらへやってきた。隣には茶髪の髪を後ろでゆるく束ねた美顔の男があくびをしながら、言った。

「やあ……。相変わらず、退屈なパーティーだね」

気だるそうにミシエルに向かって、呟き周りをぐるりと見渡した。

「ウェイクス侯爵にロレイル夫人……。さっき話していたのはバ  
ーキット夫人？」

首を傾げながら、聞いてきた。

「よく来てくれましたね、クラリス様。てつきり、こんな所には来ないかと思いましたが」

「けっ！クラリスはお前の為にわざわざ、来てやったんだ。ありがたく思え！」

「……とやけに、五月蠅い雄犬が一匹いますが、その方がレオン様？」

「んだと！誰が犬だっ！それに男じゃない！女だ！」

セインとミシエルは顔を合わせ、もう一度レオンを見た。見た目は普通の男の子だ。着ている服装もスカートではなく、ズボンを着ている。

「な、なんだよ。じろじろ見て」

「あの、女の子ですか？」

セインはやっとの思いで口を開いた。レオンは怒って、怒鳴ろうとしたがそれはクラリスの手によって遮られた。

「僕の新しい使用人だよ。普通にレオンって呼んで」

「はあ……」

「それより、良いの？もうすぐ君の演説だよ？」

指さしたその先にはマローが険しい顔でこちらに手招きをしていた。

「まずい！忘れてた！！」

急ぎ足で、ミシエルとセインはマローの方へと向かって行った。

「……あの人たちは、もう来てる？」

クラリスは前髪を掻きわけながら、レオンに聞いた。レオンはクラ



リスにくっ付き、にやにやと嗤いながらそれに答えた。

「うん もう、準備は整ったってさ」

クラリスはそれに少しだけ微笑むとゆっくりとレオンの頭を撫でた。レオンは嬉しそうにさらにギュツとクラリスにくっつく。クラリスは頭を撫でながら、演説をしているミシエルを見つめながら呟いた。「ああ……。道化師ヒエロの血塗られた演劇サーカスが幕を開ける」

（くそ、早く終わらないかな。マローの話っていつも、長いんだよな）

熱心に挨拶をしているマローの横でそんな事を思っていた。ちらつと隣をみるとすでにセインは硬直していた。

（まあ、無理も無いか。こんな大勢の人の前で立つのは初めてだもんね）

でも、面白いな、と思いつつ、セインの顔見ている。その時だった。

「きゃああああああああああ」

女の人の叫び声が耳を貫いた。

（何が起こったんだ！？）

セインも状況がつかめなていない様子で、じっとそこを見つめた。すると、

「さあさ、血塗られたサーカスの始まりだ」

赤い服を着込んだ五名の人が斧やら、剣やらを振りまわしていた。

顔は仮面をしていて分からない。逃げまどう人たち。残酷に切られていく人たち。

それぞれがまるで、踊り狂うサーカスの観客達のように何もかもが動いていた。

ミシエルはただ、立ちすくむだけだった。目の前で繰り広げられている光景は、赤い人たちはまるで……。。

まるで、赤い道化師ヒエロのようだ

その時、遠くでセインの叫び声が聞こえた。しかし、ミシエルには

それは聞こえなかった。

腹に痛みを感じ、目の前が真っ暗になった。何も見えなくなった。

・・・遠くでセインが叫んでいるのが微かに聞こえた。

「ミシエル様あああああああああああああああ」

：box2 サーカスの幕開け：（前書き）

パーティーで起こった事件。

とうとう、幕を開けたサーカス。

ミシエルの決意。赤い服装達の目的。

登場人物は整った。

台本がないこのサーカスはゆっくりと終わりに向かって進む。  
それぞれの運命の歯車が今、廻り出す。

: box 2 サーカスの幕開け :

真つ暗で何も見えない場所。

遠のく意識の中で、セインの声が聞こえた。

『ミシエル様あああああああああああああああああああ』

(僕は死んでしまったのか)

ふっと笑って、前を横を向いた。

真つ暗の闇の中で誰かがいた。背を向け、髪の色も背丈もミシエルとそっくりだった。

手を差し伸べ、そいつの肩をつかんだ。ゆっくりと、そいつは振り向いた。

僕だ。

そいつはミシエルだった。ミシエルは何も言えず、ただ立ちすくんだ。

「僕は君だ。真実の君。そして、僕は君の……」

その時、ガラガラと空間が崩れ始めた。

崩れてゆくその中でそいつは近付きこっぴつた。そして、顔をぐつと、近づけた。

「道化師だ」

その顔には道化師ピエロの仮面。にやりと口角は上がり、目は妖しい形に歪んでいる。

「君のその顔は本当に君のもの？表の顔はピエロのように笑って、裏の顔は何が隠されているの？」

ケタケタと仮面の中で奴は嗤う。ミシエルは訳が分からなくなって、一步後ずさった。

「何を言って……」

ガツと顎を掴んで、そいつは最後に言った。

「お前は……」

全てが崩れて行き、そいつが言った言葉は聞こえなかった。

視界が真っ白になって何も見えなくなった。

「ミシエル様!!!!」

ふっと眼を開けると、そこには見慣れた顔、セインの顔があった。

「セ・・・イン？」

セインは目に涙を浮かべただ、「はい」と繰り返し答えた。

「ご無事でよかったです。もう、死んでしまったのかと・・・」

ベッドのそばで、椅子に座っていたセインは鼻をかんだ。その傍の棚の上には包帯や薬、体をふくための水とタオルが置いてあり、さらには林檎が一つとナイフが置いてあった。

「ずっと僕の世話をしてくれたんだ。ありがとう。大変だったよね」  
頭を撫でて、何とか涙を止めようとした。セインは首を振って笑顔を見せた。

「いいえ。助かってほしいとただ必死で。疲れは感じません・・・」  
途中で言っただけで俯いてしまった。気になって覗き込むとスヤスヤと寝息を立てて寝ていた。

ぷっと思わず笑ってしまった。

（ありがとう、セイン）

ミシエルは眠っているセインの頭を撫でた。その時、あいつが最後に言った言葉が思い出された。

（何が言いたかったのだろう）

ミシエルはふと、パーティーで起こった事件と父の死因は何か関係があるように思えた。

（あの事件を追っていけば、父の死の真相が分かるかもしれない）  
パーティーで赤い服たちが言っていた言葉。

「血塗られたサーカスの始まりだ」

血塗られたサーカス。この言葉の意味とは？ミシエルは顔を手で覆い、上を向いた。

「くくくく・・・」

ミシエルは小さな声で嗤った。

ピカッ、ゴロゴロ……。

遠くで雷が鳴り、雨がぼつぼつと降ってきた。

(面白い。この事件の真相も知りたくなってきた)

そして、ナイフを持ち、それを柵に突き立てた。

僕があいつ等の血で、このサーカスを真っ赤に染め上げてやる！

幕が上がったなら、それを早く終わりに近づけてしまおう。

……誰もが見たくない物語が始まるのなら……。

コツコツと教会の中に足音が響く。主祭壇へと足を進める一つの影。主祭壇の周りには五人の男女がいた。影は仮面をつけ、赤い服を着ている。

ゴロゴロゴロ……。

雷はまだ、鳴っている。

「パーティーでのミシエルの誘拐計画、失敗に終わったわね」

影は言った。雷に照らされた、一人の女は言った。

「そういうあんたは、何もしなかったじゃない」

長いストレートの髪の毛の女、リリアン・ピレットはぎろりと睨んで、女の仮面を外した。

「そうでしょう？マロー・ゴルバット」

影はにやりと笑って、指を鳴らした。足元から黒い影がマローを包んだ。

「ミシエルのお目付役って本当、大変」

黒い影がバツと広がり、消えるとそこには若い女が立っていた。

「ごうんな、不細工な顔でしかも、オバサンに化けるって私には死より、苦だわ」

「けけけ。バーカ。僕はずっと若いからさ。全然、苦じゃないよ」

「ライアンは可愛いまんまだよ。僕はカッコいいよ」

ショートヘアの双子は言った。二人とも左右対称に、刻印が焼き付けられている。

「五月蠅いわよ、ライアン&セリアン・マルテロナ姉弟」

「そうだよ。カッコいいのはクウエイスだもん」

ぷくつと頬を膨らませ、子供っぽい口調で反抗しているのは、エミリー・ホンデス。クウエイスにぴったりとくっついて、頬をスリスリと腕にすりよせた。

「だつてさ。良かつたわね、グリーンシナー緑の罪人」

マローはクウエイスへと視線を向け、オルゴールの椅子に座った。クウエイスと呼ばれた男は無言で、エミリーの頭を撫でた。髪が透き通るような緑色が目立つ。

マローはふん、と鼻を鳴らし、思い起こしたようにリリアンに問う。

「そう言えば、レイチエル様の五大遺品の一つ、『ピエロの人形』はあなたが持つてるのよね？」

髪を弄りながら、足を組み笑った。リリアンは不機嫌そうにマローを睨んだ。

「それが何だつて言うの？」

「あなたはレイチエル様に、偉く信用されているようだからね。私にも何かご褒美が欲しいなあ。例えば、美しく輝くダイヤ、とかね」にやにやと笑う、マローをよそにリリアンは懐からピエロの人形を取り出し、見つめた。

「それはレイチェ・・・レイチエル様のご復活なさってからの話よ」

ドカーン！！！！ゴロゴロゴロ・・・。

雷が近づいているのか、ひと際大きい音を鳴らし、リリアンを照らした。

リリアンの目は血で染めたように真っ赤だ。リリアンは立ちあがり、五人をそれぞれ見渡し、仮面を付けた。

「さあ！我ら、赤の道化師トール・ロがレイチエル様をご復活させ、この世界を、サーカスをレイチエル様のお望み通りに真っ赤に染め上げようではないか！！」

両手を広げ、ケタケタと嗤った。

「今こそ、あの時の・・・千年前の恨みを晴らす時！レイチエル様を殺したあの忌まわしき人間どもに復讐を！！！！！」  
教会には黒い影が、六つ。そして、六つの影は黒い影に覆われ、姿を消した。



：box3

罪の玩具：（前書き）

道化師はサーカスを操り、プログラムの第一章が始まる。  
道化師は嗤う。このサーカスを止める事は出来ない。  
生き残るためには自分の顔に仮面を張り付けろ、と。  
そして、自分の罪に裁きを下せ。

人には必ず罪がある。裁きを下される者には「死」を。  
下すものには「罪」を。

それぞれの歯車は未だ、廻ったまま。

「此処か……」

ミシエルとセインはミゴールある建物の前に馬車から下りた。

「お気を付けて行ってくださいませ。ミシエル様、くれぐれも礼儀には」

「気を使うように、でしょ？」

ミシエルはマローにっこりと笑って、足を進めた。セインもミシエルについていく。

マローはそれを見送った後、馬車を進めるように前の人物に話しかけた。

「馬車を進めてくれない？クウエイス」

クウエイスは頷くと馬車を進めた。

「良いの？ミシエルにシンプルアクトを身につけて。命が縮んじやうんだよ」

クウエイスの隣に座っていた、エミリーは言った。エミリーは飴を舐めている。

「知らないわよ。リリアンが言ったんですもの。理由は言わなかったわ」

腕を組んで、ドアの小さな窓から見える景色を見た。

「何で突然あんな事を……。計画には無かったのに」

そう呟くと、エミリーは空を見上げて、マローにほほ笑んだ。

「きっと、リリアンにも事情があるんだよ」

「……事情ね」

（それなら親友の私にも言ってくれたって）

「ま、良いわ」

ぱっと髪を払った。

パカパカと馬車は進んでいった。

一方、ミシエルはミゴール警察署の受付で揉めていた。

「だから、ミゴールさんに会いたいのに！」

ミシエルは受付の男の人に怒鳴った。

「ですから、予約された人しか会えません。それに今はミゴール様は外出して不在です」

「あ、あの、ミシエル・セルカールで予約をしたのですが……」  
セインはモゴモゴと口を小さく動かして、抗議した。

「予約リストには書かれていませんが」

「そんなはず無い！！よく探して！」

ミシエルは大きな声で怒鳴った。その時、肩をポンと誰かが手を置いた。

「そんな大声で叫んでは、皆が驚くじゃろう？坊や」

振り返ると、白い髭を生やしたおじいさんが笑ってミシエルを見つめていた。

「ミ、ミゴール様！！」

受付の人は叫ぶと、周りの人々はお辞儀をした。

「貴方がミゴール・ヴィグレットですか？」

ミシエルは振り返って、きいた。ミゴールと呼ばれた人は頷いた。

「いかにも。して、なぜこんなにかわいらしい坊やがいるのかな？」

「迷子かい？」

ミシエルはちゃんとミゴールと向き合った。そして、軽く会釈をした。

「ミシエル・カルセルです。貴方と話がしたくて、来ました」

「カルセル……。ああ！君はルーカス公爵の息子かな？」

ミゴールは手を差し伸べ、握手をした。

「こんな所でお会いするなんて思わなかったよ。……お父様の事は誠に残念だ。しかし、気を確かに」

優しくほほ笑まれ、ミシエルは頷いた。セインに目をやり、ミゴールにセインを紹介した。

「こちらはセイン・ファルータです」

その時、ミゴールの顔がピタツと止まった。

「セイン・ファルータ・・・？」

「・・・？」

セインの顔をまじまじと見つめた。セインは思わず、後ずさりをする。

「はて？どこかで聞いたような名前だったんじゃが・・・。思い出せんのか？」

ミゴールは首を傾げ、しばらく考え込んでいたが首を振るとミシエルとセインに笑いかけた。

「駄目じゃのう。この頃、どうも歳でいかん。まあ、その内、思い出せるじやろ？」

そういった後、受付に言った。

「この二人はわしの部屋に連れてゆく。署名に記入しといてくれ」

「し、しかし、予約リストには・・・」

「ほっほっほっ。たまには突然の来客も悪くなくろ。皆の者、持ち場に帰りなさい」

ぱつと人がまばらに動いた。ミシエルとセインはミゴールに連れられ、部屋に辿り着いた。

ミゴールは紅茶とケーキを持ってくると、二人を椅子に座らせた。

その向かいの椅子にミゴールも座った。

「さて、話とは？」

「僕の継承式が終わった後のパーティーで赤い服の者たちがいきなり、襲ってきた事件をご存知ですか？」

「もちろん。それをルーカス公爵の事件とともに、調べておる」

「それは何か、関係があるとお思いで？」

「左様。君の周りで二件も事件が続いておるのだ。関係が無いとは到底、思えん」

ミゴールは紅茶に、ミルクを入れ、一口飲んだ。セインはモゴモゴと口を動かさず、言った。

「そ、れで、その僕たちもその事件を調べたいのです」

ピタツと、ミゴールの動きが止まった。ミゴールは真剣な顔で二人を見つめた。

「君たちはまだ、若い。この事件に関わっていたら、危険な目に遭う」

首を振り、ミシエルに告げた。

「この件には深く関わらない方が良い」

「でも、ルーカス様の死因が知りたいんです！」

「ここまで言っても分からんかね。危険だと言っておるんだぞ？」  
駄目だ、とミゴールが言おうとした時、黙っていたミシエルが口を開いた。

「危険な目にはもうとっくに遭ってます。それに今更、関わるなくて、既に関わってしまったっているんです」

ミシエルは真つ直ぐにミゴールを見詰めた。

「覚悟は出来てます。生半可な気持ちでこんな所にいるんじゃないんです」

セインも頷いた。先ほどのモジモジした顔は無く、目は真剣にミシエルと同じようにミゴールを見つめている。ミゴールは暫く、二人の顔を見つめた。そして、ため息をつく。

「はあ。若い者には敵わんの。じゃが、その目は立派じゃ」  
ふつと笑顔を見せた。

「よかるう。君たちにはミゴール警察署と一緒に調べてもらう。君たちを全面的にサポートしよう」

二人は笑って、お互いを見合った。しかし、ミゴールは真剣な顔に戻ると、ミシエルを見つめた。

「しかし、この件に関しては少し、特別じゃ。君らのどちらかは『シンフルアクト』と契約してもらう」

「シンフルアクト？」

首を傾げ、ミシエルはきき返した。

「うむ。シンフルアクトは人の罪を形にしたものじゃ。それは武器として扱う。じゃが、シンフルアクトを扱う者は裁き人によって、

使うたびに命を削られる」

「け、削られるって！」

セインは立ち上がり、怒鳴ろうとした。それをミシエルは止めた。

「セイン。ミゴールさん、続きを」

セインは仕方なく、座り、ミゴールは頷いた。

「これが赤い服たちから守る、一つの方法じゃと思っておる」

「それは赤い服たちはただ者では無いとおっしゃりたいんですね」

セインは目を見開き、あの時の事を思い起こした。

「サーカスの始まりって・・・」

セインは小さく呟く。それは二人には伝わらなかった。ミゴールは続けた。

「昔の歴史書を見ると、およそ千年前、レイチエル・ソルシアーナという女性がパールという町で大虐殺をおこなったと言われている」

「あの千年前の『血塗られた大虐殺』事件ですか？」

ミシエルはきいた。ミゴールは頷き、続ける。

「その時に今回の事件と同じように赤い服を着た者たちがレイチエルと共にいたという」

「え・・・？」

「千年前の人はまだ生きていて、僕たちを狙っているって？」

「それだけではない。レイチエルはセトリック教会の神父たちの手によって死亡したが、赤い服たちは生き続け、またレイチエルを復活させようとしている」

「ちょ、ちよつと待ってください！」

ミシエルは立ち上がった。

「千年前の人たちですよ？生きている筈がない！きつと誰かが千年前の真似をしようとしているんだ！」

ミシエルは動揺していた。

（千年前の赤い人たちはどうやって、生きてきたんだ！？）

ミゴールは写真を取り出し、本棚から一冊の本を取り出した。座るとページをばらばらと捲っていく。

「これじゃ。これらは赤い服たちの当時の写真が載っておる。そして、これは最近入手したものじゃ」

そこには緑の髪の毛の男の写真が載っており、下には名前が記入されていた。

「クウエイヌ・ハロン・・・？」

「うむ。そして最近の写真」

「！」

そこにはクウエイヌと同じ顔の男が女の子と手をつないで歩いているところが映っていた。

「そんなバカな・・・」

セインは言葉を失った。ミシエルは黙って、その写真を真剣に見詰めた。

「何かの力によって生きながらえたんじゃろう。これで分かったじやろう？シンフルアクトと契約を交わすしかない。どちらがシンフルアクトと契約するかの？」

最後に二人にきいた。セインはごくくと唾を飲み、口を開こうとした。

（僕が、ミシエル様を、ご主人様を守るんだ！）

セインは決心をし、口を開こうとした。その時だった。

「僕がシンフルアクトと契約する」

ミシエルが真剣なまなざしで、ミゴールに言った。

： box 4 己の罪：（前書き）

『罪人』。それは神に背きし者。

『裁き人』。それは神に従い、裁きを下す者。

神に従う者と背く者。

そして『罪人』は己の真の罪に驚愕し、絶望する。

ひとは誰でも罪はかならず持っている。

それを人間に持たせたのは他でもない。『神』である。

神は道化師に言った。

「己の罪に、決して目を背けてはならない」と。

道化師は嗤った。

「ならば、お前の罪は、愚かな人間どもの運命に無理やり、『罪』  
という名の最悪の幸福を入れてしまった事だ」

道化師は嗤った。

「お前こそ、己の罪に決して、目を背けるな」

道化師は仮面を外す。

「そうだろう？ だって私はお前の生んだ、『罪』なのだから」  
神は怒り、道化師を地獄へと貶してしまった。

それでも道化師は嗤い続ける。闇に染まったこの世界で、

悲劇<sup>サカス</sup>の第二章の始まりさ、と。



： box 4 己の罪：

『僕がシンフルアクトと契約をする』

セインはミシエルを見つめた。

「ミ・・・シエル様？」

ミシエルは目を瞑って、セインを見た。

「セインが僕の裁き人になるんだ」

「何を言ってるんですか！そんな事したらミシエル様のお命が！  
！」

セインは叫んだ。尊敬し、感謝をして、命より大切なご主人様を気づけたくはないと。

「貴方様の命を削るなんて出来ません！」

「だけど、これしか方法が無いんだよ」

ミシエルは力無く、笑った。

「セインが裁き人になってほしいんだ。僕はセインが思ってるような良い人じゃないから」

「そんな事はありません！それに千年前の方が生きてるなんて、信じているんですか！？」

「信じてないよ」

「・・・っ!？」

セインは言葉を詰まらせた。ミシエルは静かに続けた。

「僕は、まだ信じられないよ。でもね、今の話が本当だったら、セインには生きていて欲しいんだよ」

「そんな事・・・」

「僕は十分、セインに守ってもらった。だから今度は僕が守るよ」  
「でも・・・」

「セイン。使用人を守るのも、僕の、主の役目なんだ」  
にっこりとセインに向かって笑った。

「守ってもらっただけじゃ、きっと僕の周りから消えてしまう」

「……」

「父さんも、母さんも屋敷にはいない。僕は一人ぼっちになってしまっなのは、嫌なんだ」

「ふっ……うっ」

セインは涙を流し、顔をあげた。その顔には笑顔があった。

「……分かりました。でも、僕にもやっぱり、貴方を守らせてください。僕も一人はもう嫌ですから」

ミシエルは目を見開いたが、ほほ笑むと頷いた。

「うん」

ミシエルはセインの頭を撫でて、いった。

「ありがとう、セイン」  
と。

「それでは始めるぞ」

ミシエルは暗い部屋でシンフルアクトと契約を交わす儀式を始めていた。ミゴールの声はごわん、ごわんと部屋に響いた。ミシエルの隣にはセインが手をつなぎ、立っていた。

「暫く、つらいかもしれんが、我慢してくれ」

ミシエルとセインは目を瞑り、笑った。

「大丈夫です。覚悟は出来ていますから」

「……それでは」

ミゴールはミシエルの胸に手を置き、何かを唱えた。

「我、神に使いし者。哀れな罪人に罰を。そして裁き人を与えよ」  
ミゴールが呪文のようなものを唱えた瞬間に、ミシエルの体に異変が起きた。

「あゝあゝああああああああああ！！！！！！！！！！」

(痛い……熱い……！はち切れる！！！！)

セインにも同じ事が起こっていた。体に湧き上がる体が張り裂けそ

うな痛みと、ふつふつと血が煮えたぎるような熱さが続いた。

「あぐ……うがっ！」

体は石のように固まって、動けない。ミゴールは手を首へと持っていき、最後に唱えた。

「この者には、シンフルアクトを」

言い終え、手を離すとミシエルとセインはうずくまった。

「はあっ……はあっ」

息が切れて何も言えない。顔は汗でべっとり濡れていて、呼吸をするので精いっぱいだった。

「大丈夫かね？」

ミシエルとセインにミゴールは声をかけた。

「だ、大丈夫です」

「はい……。平気です」

やっとの思いで返事を返す事が出来た。

「そうか……。良かった」

ミシエルはセインに顔をむけると、セインはミシエルの首元を指さしていた。

「ミシエル様、その刻印は……？」

ミシエルは何を言っているのか分からなかった。首を傾げ、ミゴールを見た。

ミゴールはにっこりと笑って、部屋のドアを開けた。

「一休みをしてから、君たちに説明しよう。……紅茶でも用意しようかの」

紅茶の良い香りがセインとミシエルの気を落ち着かせた。二人は一口、それを飲むと体の底から、体力が回復してくるような、そんな感じがした。

「少しは落ち着いたかね？」

ミゴールはクッキーの缶とキャンディーを持ってくると、テーブルの上に置き、一つキャンディーをつまんだ。

「さて、ミシエル君の首にあるその刻印は、罪人・・・シンフルアクトを持つ者に付けられる」

「僕の首に刻印が・・・？」

「うむ」

ミシエルの首には確かに、十字架に羽が絡まっている刻印が付けられていた。ミゴールはキャンディーの包み紙を剥がしながら、続けた。

「シンフルアクターは罪人にとっての裁き人、つまり君の場合、セイン君に許可をもらわなければ使えない。そして、君の罪は・・・胸のポケットからカードを取り出し、それをトン、とミシエルの額に当てた。すると、カードに男の子が小さく写り、頭からは何か、白い靄もやの様なものが出ていた。そしてその子の手には槍。

「・・・『忘却』じゃの。君のシンフルアクトは『忘却槍』じゃ」

「忘却？ミシエル様が何か、忘れていてそれが罪だと？」

セインは眉を寄せた。

「ふうむ。わしには何とも言えん。己の罪は己で見つけ、償うものじゃからの。他者には他者の罪は分からない」

「己の罪・・・」

ミシエルは呟いた。

(僕は何を忘れているのだろうか？どうしてそれが罪なのだろうか？)

「罪を見つけるって、一体どうやって？」

「ある人物は突如思い出し、ある者は人から自分の罪を聞かされ、償った。色々な方法で見つけた。しかしそれは決して、偶然ではない。神が運命の中に人を正す為に組み込んだ『必然』な『偶然』なのじゃよ。じゃから必ず、いつか、そして思いもよらない方法で人間は己の罪を分かっってしまうのじゃよ。それは実に残酷じゃ。じやが、それが罪人にとって幸福なのかもしれない。まさに神がわし等人間に仕組んだ、とんでもなく残酷な幸福なのかもしれんの・・・悲しい事にな」

ミゴールは口の中にキャンディーを入れると、口の中で転がした。

ミシエルは紅茶をまた一口飲むと、ふと、ある疑問が浮かんだ。

「あの、先ほどの千年前の『血塗られた大虐殺事件』で質問があるのですが・・・」

「ふむ。聞こう」

「何故、レイチエル・ソルシアーナを復活させるのにこんなにも、時間が掛かるのでしょうか？」

「・・・」

「ひよつとしたら、レイチエル・ソルシアーナの復活には何か、必要な物があるのではないのですか？」

（でも、それだけじゃない。それだけだったら、こんなにも時間はかからない筈だ。他に何かがあるのかもしれない。僕のパーティーでの事件も、父さんの事件も何か関係があると思えない。待てよ？もしかして・・・）

「ミゴールさん。これは僕の、あくまで僕の予想ですが、レイチエル・ソルシアーナと僕は何か関係があるのでは無いのでしょうか？」  
ミシエルはミゴールを見つめた。ミゴールは一瞬、目を見開くと、突然何かを思い起こしたように立ち上がり、バツと本棚の中をあたり始めた。本をバサバサと床に落としていく。

「ミゴールさん？」

セインは心配そうにミゴールを見つめた。無理もない。なぜなら、狂ったように本棚をひっかきまわし始めたのだから。しかし、ミシエルにはその意味が分かっていた。これから来る真実に覚悟を決めて・・・。

： box 5 真実：（前書き）

道化師は暗闇の中で、『真実』に怯える子羊を見つけた。

「真実が怖いのであれば、仮面を付けよう。そうすれば怖くない」  
子羊は仮面を付けた。そして嗤った。

「ほんとだあ 『真実』なんて怖くない」

これが『偽り（道化師）』の『真実』。

仮面を付ければ、偽り。真実なんて何処にも無い。

道化師は子羊に囁いた。

「もつと、『友達』を増やそうか？」

子羊は満面の笑顔で言った。

「うん 笛を鳴らして、子供たちを呼ぼう」

道化師は笛を鳴らす。笛を鳴らしながら思った。

偽りは苦しいもの。醜いもの。

そんな事を言ったのは誰だっけなあ。

： box 5 真実：

「あつた・・・」

ミゴールは一枚の紙を取り出した。紙は黄ばんでいて、所々が破れていた。

「何ですか？これ」

セインは紙を覗きこみ、聞いた。

「これは千年前の『血塗られた大虐殺事件』のレイチエルが殺される前に残した、遺書じゃよ。・・・恐らく彼女は、自分が殺される事を予知しておったのじゃろう」

「何て書いてありました？」

「うつむ・・・。所々、文字が消えていて上手く、読めんが・・・やってみよう」

ミゴールは遺書を読み始めた。

『信頼を置ける、赤い道化師達よ。これを読んでいるのかしら？これが読まれているという事は私は死んだのかしら？

でも、悲しまないで。赤い道化師達さん。私は復活する事が出来るの。でも、貴方達に頼みたい事があるのよ。やってくれるかしら？

「ピエロの人形」、「絵本」、「壊れたハーモニカ」、「銀の鍵」、「金の錠」。

これ等をどうか、探してちょうだい。

そして、私を復活させてちょうだい。

また貴方達と一緒に、この世界を真っ赤に染めたいわ。

神父達に私はこれから、殺されてしまうかもしれないけれど、貴方達が私を復活させてくれるって信じているから、怖くないわ。

それと探す時に、私の大好きな人「アランド・セルカール」、の子孫を探してね。

その子がこれ等を探す、手掛かりになるわ。

それとね、貴方達が死なないように、この遺書には魔法を掛けてお

いたわ。

それは「永遠」で「脆い」ものだから、気をつけてね。

赤い道化師      レイチエ

ル・ソルシアーナ』

ミゴールは一通り、読み終えた。

（アランド・セルカールの子孫……。これが。だから奴等は、僕のパーティーに現れたんだ。僕を使って、遺品を探し出そうとしてるんだ）

「何と言う事だ。レイチエルの五大遺品にこんな意味があったとは……」

「五大遺品？先ほどのレイチエルが探してほしいと言った、あれですか？」

「うむ。我ら、警察署の人間はそう言っている。神父達が、これ等をレイチエルが死ぬ前に回収し、嚴重に保管しておいたはずだった」「『はずだった』と言う事は、紛失してしまったのですか？」

「いや、盗まれたのじゃ。何者かによって」「では、それが敵、『赤い道化師』でしょうか？そいつらに渡ったという事は有り得ないですね。現に今、まさにそれを探している様子ですから」

セインは考え込んだ。

（しかし、盗んだ奴は一体何のために？そして、どうやって、盗む事が出来たのだろうか？）

「でも、これで確信した」

「？」

ミシエルが笑って、セイン見た。

「どうして、僕のパーティーに『赤い道化師』達が現れたのか。どうして、父さんは死んでしまったのか。僕に全てが関係してるんだ。それにこの二つの事件のつながりがようやく、見えたよ」

セインは頷いた。ミゴールも頷いた。

「やっぱり、この事件を追って行く。僕の罪、『忘却』の意味と



父さんの死因。そして、レイチエル・ソルシアーナとアランド・セルカールの関係も知りたい。僕に関する全ての真実を知りたいんだ」  
「ミシエル様……」

「その真実がどんなに、恐ろしいものであっても僕は受け止める。真実から、目を背向けたりなんてしない」

ミシエルのその瞳には強い光が宿っていた。

セインはその瞳をみて、思った。

これからの起こるであろう悲劇サーカスに希望の光が宿るのだと。

セインとミシエルはミゴール警察署を後にし、細い路地を歩き、屋敷へと向かっていた。

『手始めに、この五大遺品を探そう。何か情報を掴み次第、そちらにも連絡しよう。……気をつけなさい。あやつらは何処でも、どんな時でも君を狙っているだろう』

ミゴールが別れ際に言った、言葉をミシエルは思い出した。

(……僕にはインフルアクトがある。でも、奴らの情報が少ないから、どれ程の力を持っているのか分からない。十分に気をつけなくては)

ミシエルの足には自然と、慎重さが感じられた。セインもまた、これからの事を考えていた。

(いざとなったら、僕がミシエル様をお守りするんだ。この命を懸けて)

「きやはははは。ミシエル・セルカール発見」

「きやはははは。本当だね、ライアン。今日は何て、幸福ラッキーなんだろうね」

突然、バサツと目の前に赤い服の顔の良く似た、二人の男女が降りてきた。

「よおしくねえ。ミシエルう」

「!?!」

「貴様ら!あのパーティーの時の!?!」

セインが叫んだ。双子はにたあと嗤った。パーティーで『サーカスの始まりだ』と叫んだ奴らだった。

「そおだよ 僕らは赤い道化師、『レッド・ピエロ』のメンバー、ライアン&セリアン・マルテロナ姉弟だよ」

「赤い道化師って、レイチエル・ソルシアーナの遺書に書いてあった……」

「レイチエルの手下か!？」

双子はきよとん、と顔を見合わせ、首を傾げた。

「手下? 違うよねえ?」

「うん。僕らはレイチエルのお友達だよ?」

「お友達?」

「うん 僕らはねえ。レイチエル様に拾われたの」

「それでね、レイチエル様が友達になって、遊んでって言ったから、遊んだんだよ?」

そう言った瞬間、二人の額から、刻印が現れた。

「あれは……!」

「奴らも、シンフルアクトを持っているのか!？」

「ですが、ミシエル様、奴らは『裁き人』の許可をもらっていません!」

「きやは レイチエル様の魂が僕らの『裁き人』 そして、魂は僕らにも君らにも見えないんだよ?」

「何を言ってる……」

双子はカードを取り出した。そのカードには悪魔が盾と矛を持っている絵が描かれていた。

にゅっとカードから影が飛び出たかと思うと、それらは盾と矛になった。

「僕らの罪はあ、『悪魔』なんだ」

「ライアンのシンフルアクトは『悪魔盾』」

「セリアンのシンフルアクトは『悪魔矛』」

愛おしげに二人は、シンフルアクトを見つめた。

「遊ぼう ミシエルと遊んであげてって、レイチエル様が言ってるのお」

二人は狂ったようにそう言うと、セインに向かって、攻撃をし始めた。

「「きゃは お前は邪魔だよお レイチエル様が要らないってえ」「  
「・・・ツ」

「セインツツツツ!!」  
ミシエルは叫んだ。それと同時に砂埃が巻きあがり、三人の姿は見えなくなった。

「・・・」

「せ、セインツ！」

ミシエルがセインの元へ走り出そうとした瞬間。

キンツ。

「僕は気が弱いけれど・・・」

砂埃からの中から、ライアンとセリアンが飛び出してきた。いや、飛ばされて出てきた。

・・・セインによって。

「ご主人様の為なら、いつだって、僕は強くなる!!!」

セインがゆつくりと、砂埃から出てきた。その手には小さなナイフがあった。倒れていたライアンとセリアンは、ゆらりと立ちあがった。その顔には無邪気な笑みがあった。

「わあい 楽しいな、楽しいな」

「早く、ミシエルと遊びたいけど、お前とも遊びたいな」

セインはミシエルの前に立って、言った。

「・・・ミシエル様、そこでじっとしていて下さいね？」

「セイン？」

セインは笑って、ミシエルを見た。

「いつもご主人様に守られていてばかりでは、使用人失格なので」  
そう言うと、ナイフをセリアンとライアンに突き出し、叫んだ。

「僕はミシエル様の専属使用人、セイン・ファルータだ！これ以上、

「ご主人様を傷つけようものなら、僕が斬る！」

セインにはいつもの弱気な姿はなかった。

その目には光が宿っていた。ミシエルは思った。

（いつの間にかこんなに強くなったんだろっかね？僕が見ない間に、たくま遅く  
しくなってるさ）

ふっと笑みがこぼれた。

「・・・死んじゃ、駄目だからね？」

セインは頷き、二人に向かって、風のように向かって行った。

カキンッ、カンッ。

小さなナイフで、セインは見事な身軽さでセリアンの長い矛をわしてゆく。

「きゃは お前、セインって言うんだねえ さっきの瞳とは随分、違うねえ。良いなあ・・・」

その瞳、きらきらしてて、可愛い。僕ね、小さい子って大好きなんだあ

セリアンはセインの腹を目がけて、振り下ろす。

セインはそれをナイフですばやく、防いだ。

キンッ。

金属がぶつかるような、音が響いた。

「僕は小さい子じゃない。ご主人様、ミシエル様のお傍には小さくて、よわい子なんて要らない」

（いつだって、そうだ。僕はミシエル様の後ろを付いて行くばかり。ミシエル様の背中が温かくて、大きいけれど、もうこれからは頼ってばかりじゃいられない！）

「きゃは 本当にそうなのかなあ？」

「!？」

いつの間にか、セリアンの顔が間近にあった。

「そうじゃないでしょう？お前は、ミシエルがいなかったら、なんにも出来ない、ただの『小さい子』なんだよあ 本当のお前は『小さい子』なんだよ」

バツと後ろに後ずさりした。

「何を言ってるんだ」

「『大きく』て、強いつていう『仮面』を被っているだけなんだっ  
てばあ」

「何っ!？」

シユンツ。ピシユツ。

ぽたっ。

セインの頬から、一筋の血が流れ落ちた。

(いつの間につ?)

「無駄無駄。僕は強いんだから 無理しちゃ、駄目だよ。『道化師』」

「

「誰が、『道化師』だッ!」

シユンツ。カキンツ。

「僕は『道化師』なんかじゃない! ミシエル様の為なら、命だつて  
捧げられる!」

ケタケタとライアンは嗤い、矛を振りまわした。

「『道化師』だよ 『小さい子』の癖に、『大きい子』の仮面を  
被っちゃって。そんな子には僕から、お仕置きだよ」

ダンツとジャンプして、すばやくセインの背後に回った、ライアン  
は上から、矛を振り下ろす。

「ごめんねえ お前の事、大好きだけど、レイチエル様が殺せつて  
さ」

(しまった! 後ろを・・・)

目を瞑り、覚悟を決めた瞬間。

バシユツ。

「・・・くッ」

「なッ!？」

目を開くと、そこにはセインの目の前に立ちほだけり、腕を切られ  
ている、ミシエルの姿があった。

「ミシエル様! お怪我を・・・」

セインがミシエルに駆け寄った。その時、  
パンッ。

ミシエルは両手で、思いつきりセインの両頬を叩いた。

「いったーッ！何をするんですか、ミシエル様！」

「何をするんですか、だつて？」

「え・・・？ミ、ミシエル様？」

ゆらりとミシエルは立ちあがり、セインをぎろりと、睨んだ。その背後には鬼がいた。

・・・恐ろしい姿だ。

「あ、あのお・・・一体？」

ビシッといきなり、ミシエルが指をさし、早口でべらべらとお説教を始めた。

「まだ自分が言っていた事が分からないのか！？僕の為に命を捧げる？僕の為？ふざけるなあ！お前は僕を言い訳にして、偽善ぶつてるだけだろ、この『偽善者』がッ！大体、あのライアンって奴の言う通り、『小さい子』の癖になに、強がってるんだ、ヘタレが！ああ、そうだ、お前は『ヘタレ』だッ！その言葉の方がしっくりくる！全く！折角、強くなつたなあと感心していたら、いきなりこれかよッ！？どんなオチだよ！ええ！？さつき言っていた事を反省しろ、このヘタレッ！」

はあ、はあと息を切らすミシエル。セインはポカーンと口を開け、茫然としていた。

「・・・もう僕の為について言う理由で戦うなよ。これ以上自分を傷つけてどうするんだ」

セインは自分の言っていた事をようやく、理解した。

（何だ、何をやっているんだ、僕は。こんなにも主を傷つけて・・・これじゃ専属使用人失格だよ）

「全く、世話の焼ける奴だよ、セインは。黙って見てられないよ・・・」

ミシエルは笑った。セインも笑った。

「僕も戦うよ」

ミシエルは真剣な眼差しで、セインに言った。セインも頷き、首の刻印の上にカードを当てた。

「神よ、我は『罪人』を裁く、『裁き人』。裁き人にシンフルアクトを使用する許可を与える。どうか、この『罪人』にシンフルアクトを」

「きゃっは 何だか、良く分からないけど、とりあえずセインは死んじゃえ！」

「セリアンばかりずるいい。僕も遊んでえ」

ライアンは叫んだ。セリアンはにっこりと微笑み、ライアンに言った。

「じゃあ、二人で半分こね」

「うん」

二人はセインに向かって、突撃した。

「きゃはははは バイバイ、セイン」

砂埃がまた巻きあがった。その中で双子は嗤いながら言った。

「・・・誰がバイバイだった？」

「！？」

ビュッ。

風が巻き起こり、双子は目を見開いた。

そこには槍を持った、ミシエルが盾と、矛の両方を防いでいる姿があった。

「僕の罪は『忘却』。そして、僕のシンフルアクト、それは・・・」

「『忘却槍』」

双子は声を揃えて、呟いた。ミシエルは槍に力を込めた。そして、ふっと頭によぎった言葉をいつの間にか、声に出していた。

「『神の罪槍』」

「！？」

ビュンッ。

槍が突然白く光り出し、ライアンとセリアンを、吹き飛ばした。

「凄い……。あの双子を一気に」

セインは眩き、槍を見た。

（ミシエル様のさつき攻撃は……。『罪人』が撃つ、攻撃とは思えない。もし、さっきの攻撃が本当に「罪の槍」が撃った攻撃ならば、それはまさに、神のもの。これが『神の罪槍』！）

「あつれえ〜？お前、シンフルアクトを持っていたのお？」

「どつりで、シンフルアクトの存在を知っていた訳だあ」

二人はケタケタと嗤って、ミシエルを見た。

それはまさに悪魔の嗤い。

狂った「悪魔の双子」は叫び出す。

「きゃっは〜 楽しいなあ」

盾と矛を持った「悪魔の双子」は、ルンルンとした口調で、言った。

「遊びはまだまだ、これからだよお ミシエルう〜」



： box 6 過去：（前書き）

『過去』。

それは生きている限り、付いてくるモノ。

脆く、気付けばそれすらの存在を忘れてしまうモノ。

それでも、『過去』は存在し、付いてくる。

それは『脆く』て、『確実』なのだ。

『過去』は書き換えられない。

忘れてしまっても、いつかは思い出す。

それは残酷なのかもしれない。

苦しい『過去』ならば。

でも、時には楽しい『過去』だってある。

そんな『過去』を振り返り、幸福になれる人間は羨ましい。

道化師は壊れた時計を取り出し、見つめた。

何故、羨ましいかって？

それは僕がそんな『過去』を幸せだと思えない、愚かな道化師<sup>ヒエロ</sup>だからだよ。

： box 6 過去：

キンツ。シュン、シュヒツ。

ミシエルは相変わらず、双子と戦闘を繰り返していった。

「はッ！ 一体、その小さい体に何処にそんな力があるんだ？」

槍を突いても、ライアンの盾で防がれ、その隙にセリアンに矛で攻撃をされる。

セリアンの場合、思いつきり槍で突いても、ビクともしない。それどころか、逆にミシエルが盾で押し返されるほど。

「きゃはは 僕ね、『大きい子』って大好きなんだ だって、強いし、カッコいいでしょ？」

「は？」

ミシエルは聞き返した。セリアンにはやりとりと嗤った。

「だってね？ 僕ね、もの凄く我が儘だからね？ 『大きい子』に背負ってもらわないと駄目なの。」

セリアンは続けた。

「それでね？ ミシエルとセインのやりとりを見てたら、セインが羨ましくなっちゃった。」

ふっと、ミシエルも笑った。

「何で？」

聞き返すと、セリアンは「きゃはは」と笑った。

「セインの事は僕が守るから、っていう時にね、ミシエルの背中って温かくて、大きく感じるんだあ。」

そう言うと、双子は突然、攻撃を止めた。

「何……？」

「アランド・セルカール様もそんな人だった。」

「やっぱり、アランド様の血は争えないね 見た目も性格も全て似ている。」

「だけどね、僕らは寂しくなんかないんだ。」

「だってね、レイチエル様が喜んでるから」

「僕らも喜んでるから」

「……」

「だから、僕はミシエルが大好き」

「へえ？アランドって人、レイチエルって言う人好きになる位、立派な人だったの？」

ミシエルは俯き、聞いた。

「うん だ」見つけたわよ、マルテロナ姉弟」

セリアンが口を開きかけた時、頭上からりん、とした声が降ってきた。巨大なウサギの人形の上ののっている。その人形はふわふわと宙を浮き、やがて、双子とミシエルの間に降りてきた。

「また、あんた達、勝手な事をして！何、計画を無視してんのよ」  
リリアン・ピルット。双子が見当たらないので、今まで探していたのだ。長いストレートな髪が印象につく。色は茶髪で、ツヤがあり、顔も整っている。

リリアンは目をミシエルに向けると、にこりと笑う。その顔にいささか、ミシエルもドキッとしてしまう。

「やはり、アランド様に似ていますね、ミシエル様。この双子がご迷惑をお掛けしました」

そう言うと、リリアンは頭を下げた。

「本当に迷惑だったんだけど？さっさと双子を連れて行ってくれる？」

「……そうですね。そうします。性格はアランド様に似てないようですが」

ミシエルは笑って、リリアンを見つめた。

「はは。そうみたいだね。言っておくけど、僕はそのアランドって人に似てないと思うよ？寛大じゃないし、性格も良い方ではあるけど、それでもアランドには遠い存在だと思うよ」

「……帰るわよ、マルテロナ姉弟」

三人は人形にのった。リリアンは振り返り最後にミシエルに告げる。

「ミシエル様、それでも貴方は『正直さ』という面ではアランド様に似ていますわ」

「それでは御機嫌よう」とリリアンは最後に言葉を残し、あっという間に人形は豆粒ほどに小さくなってしまった。

「ッ」

ミシエルがその人形を見送った直後、どくん、とミシエルの心臓が波打った。

「ミシエル様！」

倒れそうになったミシエルを慌ててセインが受け止める。視界は真っ暗になり、ミシエルは意識を失った。

「今から、孤児院に行くんだ。ミシエルも行くかい？」

温かい笑顔で、ミシエルに手を伸ばす、父、ルーカス。

「うん！僕の弟を選ぶんだよね？」

幼いミシエルは、満面の笑顔でルーカスに聞いた。

「ああ・・・。そうだよ」

ああ、これは過去の記憶か。懐かしいな。

ミシエルは暗闇の中でルーカスと幼いミシエルの記憶を見つめ、立っていた。

孤児院。そうか、ちょうどクリスマスにセインを養子にしたんだっけ。

目の前で、ミシエル達の周りの景色が一変し、二人は雪が降る街の中を歩いていた。

ルーカスの隣で、一生懸命に話しかける幼いミシエル。ルーカスは微笑みながら、それに応えていた。

しばらくすると、二人の目の前に大きな孤児院が現れる。その中に二人は入って行った。

また、景色は一変する。

「まあ、ルーカス様。ご無沙汰です。この子がミシエル様？」  
歳の老けたおばさんがルーカスに話しかけてきた。

「ああ、そつだよ。ところで、早速見ても良いかな？」

「もちろんですとも」

三人は歩いて、廊下を歩いた。その先にあるドア。それをおばさんが開いた。

「さあ、選んでいいぞ。ミシエル」

その部屋の中にはほんわりと明るい光の中で、遊びまわる子供達。ミシエルにはそれが眩しく感じた。

楽しそうだな、眩しいや。

ミシエルは疲れて、その場に座り込んだ。映画を見ているような感覚で自分の過去を振り返るのは何とも不思議な感覚だった。

幼いミシエルは遊びまわる子供たちの中を歩いた。プレゼントを包んでいる子もいれば、クリスマスツリーの飾り付けをしている子もいた。皆仲良く、それぞれクリスマスに向けての準備をしている。ただ一人、幼いセインを除いて。

セインは部屋の隅でうずくまり、顔を組んでいた腕に埋めていた。幼いミシエルはセインを見つけた。セインに近づき、話しかける。

「きみ、こんな所で何をしているの？」

セインはピクリとも動かない。幼いミシエルはその隣に座った。その時、セインの肩がピクツと震えた。幼いミシエルはそれに気づいてはいたが、話しかけずにじっと遊んでいる子供たちを見つめた。しばらくの沈黙。聞こえるのはがやがやと騒いでいる、子供たちの声。それしか聞こえなかった。そんな沈黙を破ったのはセインだった。

「君は・・・親に捨てられたの？」

顔を埋めたまま、ミシエルに質問をした。

「ううん。僕はね、弟を選びに来たの」

幼いミシエルは笑って、それに答えた。幼いミシエルは続けた。

「でもね、お屋敷にはね、お母さんはいないんだ。お母さんは僕がちっちゃい時に出て行っちゃった」

「・・・・・・・・」

セインはまた、黙り込んだ。それでも続けた。

「でもね、それからお父さんは早く、仕事から帰ってくるようになったんだ」

「……………」

「それでも、やっぱりお父さんがいない時、寂しいから弟を貰う事にしたの」

「……………」

「でも、まだ、良い子はいない」

「……………」

「君は親に捨てられたの？」

「……………」

幼いミシエルは耳を傾けた。すると、腕の中からはしゃくり上げるような声が聞こえた。

セイン……………」

ミシエルはその光景を目にし、少し、目をそむけたくなった。

記憶の中で幼いミシエルは肩をポンポン、と叩いた。っして、にっこりと笑う。

「きーめたっ」

短くセインに囁きかけるように耳に小さな声で言った。

その時、初めてセインが顔をあげた。幼いミシエルはセインの腕を掴むと、足早に子供の中を歩き、ルーカスの目の前にセインを連れしてきた。

ルーカスは笑って、幼いミシエルに聞いた。

「その子にするかい？」

問いかけられたミシエルは嬉しそうに頷く。

「うん！」

笑顔のまま、セインに話した。

「今日から、君は僕の弟だよ」

その瞬間、幼いミシエルは幸福に包まれた。おばさんも子供達も幸福に包まれた。記憶を見ていたミシエルも幸福に包まれた。

セインが初めて笑顔を見せたから。

「ミ……様」

「う……ん」

「ミシエ……様」

「ん……」

「ミシエル様！」

セインに怒鳴られ、ミシエルはバツと起き上った。

「セ、セイン……。声が大きいよ」

キーンと耳鳴りがする耳をミシエルは塞ぐ。セインは慌てて、謝罪した。

「すすすみません！耳は大丈夫ですか！？」

そんな姿にミシエルは笑ってしまった。

「ミシエル様？」

ミシエルは笑いが止まらなかった。それは幸せだった。そして、温かかった。

セインも、そんなミシエルを見て、笑った。

（良かった……。セインがちゃんと笑顔になれるようになって）  
二人は笑いつづけた。

それはあつという間の幸せなのかもしれない。

それでも二人は笑いつづける。

始まった悲劇<sup>サカス</sup>を忘れるように。

：box7 鎖：（前書き）

ステージにライトの光が照らされた。

道化師はマイクを持って、ステージの脇から出てきた女の人を紹介する。

「本日のメイン、バークット夫人です」

紹介された『バークット夫人』は狂ったように踊る。

そんな中、道化師は紹介を続ける。

「バークット夫人の過去は醜いモノ。今夜はそれをご紹介するとして。さて、バークット夫人の穏やかという仮面を外すとどんな醜い顔が出てくるのやら……。または真実ほんとうの顔も穏やかな顔なのか？」

道化師は片手を広げ、言った。

さあさ、苦しい、苦しいお話が始まるよ。



ミシエルとセインは今日、バーク夫人のお茶会に誘われ、屋敷に訪れていた。

扉の前に立つと、タイミングよく、開く。そこには優しい笑顔でバーク夫人がミシエルたちを迎えた。

「いらつしゃい、ミシエル。よく来たわね。あら、こんにちは。セイン」

「お茶会にお招きいただき、ありがとうございます。バーク夫人」  
「僕にまでお招き頂き、ありがとうございます」

バーク夫人はミシエルたちとあいさつを交わすと、二階の大きなテラスに連れていき、座らせた。

テーブルにはケーキやクッキーなどがティースタンドに並べられていた。

「ふふ。そこにあるスコーンは私が焼いたのよ。食べてね」  
ミシエルとセインのティーカップに紅茶を淹れる。

「ミシエルはミルクティーで良いかしら？」  
「はい。ありがとうございます」

ミシエルにミルクティーが渡され、その後セインにも渡された。二人はそれを一口、飲んだ。

「アッサム、ですか？」  
セインがバーク夫人にきいた。

「そうよ。だから、ミルクティーが美味しいでしょう？」  
優雅に笑いながらケーキを一口、口に運んだ。

「今日はね、貴方達にききたい事があるの」  
いきなり、真剣な顔で、ミシエルとセインを見つめた。

「シンフルアクトと、契約したのね？」  
「・・・ミゴールさんから聞いたのですか？」

「ええ」

一時の沈黙が流れる。最初に口を開いたのはバーク夫人だった。

「ミシエル。まだ貴方には時間があるわ。こんな所で、時間を短くしてどうするの？きつと、貴方のお父様も・・・ルーカス様も悲しんでると思うわ」

ミシエルは何も言わない。

「・・・それでも、この後も続ける？」

「え・・・？」

この後も自分を止めるのかと思った、ミシエルには思いがけない言葉だった。

「正直、こんな無謀な事はやめてほしいと思ってるわ。でも、貴方がどうしてもというのなら、仕方ない事だと思うわ」

バーク夫人はもう一度、聞いた。

「それでも、良いのね？」

ミシエルは真つ直ぐな瞳で、バーク夫人を見つめた。

「それでも、僕は真実を追います」

バーク夫人は穏やかに、「そう」と笑った。

「ついでに僕もお聞きしたいのですが・・・」

「ええ。何かしら？」

「バーク夫人も、『シンフルアクト』をお持ちで？」

バーク夫人はスコーンを一口、食べると頷いた。

「ええ、そうよ。私の罪は『想い』。シンフルアクトは『想い鎖』」

「それは・・・？」

「ふふ。それを説明する前に是非、紹介したい人がいるの。清チン水・シユイ、来なさい」

テラスから、部屋の中へ声を掛けると、一人の女の子が部屋へと入ってきた。そのままテラスへ来ると、丁寧なお辞儀をした。

「初めまして、ミシエル様。そして、セイン様。私は清チン水・シユイと言います。

水と呼んでください」

女の子はミシエルより少し、背が高い。にこりと笑う顔は明るさを

感じる。

「宜しく。ミシエル・セルカールです。こちらはセイン・ファルータ」

セインはお辞儀をした。

「セインとお呼び下さい。僕も、使用人なので」

「はい」

にっこりともう一度笑う。

「水は中国出身なのよ。私が中国へ行った時に、拾ったの」

穏やかに笑う、バーク夫人をよそに、シユイはバーク夫人の腕を肘でつついた。

「もう、バークキット様だったら！そんなにしんみりした話をしてどうするのよお」

セインは口をあぐりと開けた。無理もない。セインはマローから厳しい使用人の心得を学んでいた。主人を肘でつくくなど言語道断有り得ない事なのである。それを他の貴族の目の前で見せつけてしまったのは「自分は駄目な使用人です」と言っているのと同じである。そんなセインとは裏腹に、ミシエルは思わず吹き出してしまった。

「水、セインが驚いているわよ」

くすくすと笑いながら、バーク夫人は水に言った。

「あはつ。やだ、そんなに固まらないでよう」

先ほどの丁寧な挨拶は何処へやら。完全にキャピキャピモード。そんな時、ミシエルは話を切り出した。

「それで、先ほどの話ですが」

「ああ、そうだったわね。罪の『想い』の意味は、今は亡き夫を想い過ぎたあまりに、縛り付けてしまったと言う事」

「というと？」

バーク夫人は紅茶を飲むと、ティーカップを置いて、静かに話しました。

「私にとって、夫は光みたいなものだったわ。とても穏やかで顔立ちも素敵で。当時、夫は周りの人からとても、好かれていたわ。も

ちろん、女性にもね。そんな中で私を選んでくれた。嬉しかったわでも、結婚してしばらく、私は不安になってしまった。夫はこんな私を嫌いにならないのだろうか。そして、私は不安のあまりに、夫を縛り付けてしまった。周りの女性と話せば、何を話していたのかを問いかけ、女性との接触を禁じたこともあったわ。．．．それでも、夫は笑ってくれた。君の為なら、僕は耐えられるよ、と。そこでは気付かなかつたの。夫の心の悲鳴に。夫が亡くなった後、私は過去の自分をとて、恨んだわ。でも、恨んでも、悔やんでもどうしようもない。だから、私は『罪人』になった」

空気が冷たく、感じた。

(あんな穏やかなバーク夫人にそんな過去があつたなんて)

「だから、私の罪は『想い』<sup>シユイ</sup>」

バーク夫人は立ちあがると、水<sup>シユイ</sup>から、カードを取り出し、ミシエル達に見せた。

「これが私のカード」

そこには女の人が鎖を持って、男の人を縛り付けている絵があつた。男の人は半分は穏やかに笑い、半分は泣いている。

まるでバーク夫人から聞いた話を映し出したかのように。

「私の『裁き人』<sup>シユイ</sup>は水よ。セイン、同じ主人を裁く者同士、仲良くしてやって下さいますか？」

セインに問いかける。セインはにっこりと笑って

「喜んで」

水<sup>シユイ</sup>に手を差し伸ばす。水<sup>シユイ</sup>もにっこりと笑って、その手を握った。

ミシエルとバーク夫人はその光景をみてお互いに微笑みあつた。ミシエルはその時、思い出した様にバーク夫人に問いかけた。

「そう言えば、貴方にはお孫さんがいらっしゃるのですよね？」

「ええ。そうよ」

「ど．．．」

「ミシエル様！」

セインがミシエルの後ろを指さした。ミシエルは急いで後ろを振り

向くと、緑色の髪の毛の人物がいつの間にかミシエルの背後に立っていた。

(この間見た、写真の男、クウエイヌ・ハロン・・・!?)

「何です？貴方は。誰の許しを貰って此処にいるのです？」

バーク夫人がクウエイヌの前に立ちはだかり、言った。クウエイヌは無表情のまま、ミシエルを見て、低い声で言った。

「俺はミシエルに用があつて来た。悪いが、そいつは俺が連れて行く」

「そんな事を言つて、簡単に引き下がるとお思いですか？クウエイヌ・ハロン」

ぴくつとクウエイヌが眉を寄せた。

「その名で呼ぶな。その名を呼んでいいのはエミリーだけだ」

「エミリー・・・？」

セインが呟くと、クウエイヌが睨む。口を開きかけたその時、鎖がクウエイヌの顔をかすめた。クウエイヌの顔からは傷ができ、そこから赤い鮮血が滴り落ちる。バツとクウエイヌはそこから避け、攻撃してきた主を睨んだ。そこにはいつの間にかバーク夫人が『想い鎖』を出していた。その背後には水鎖シユイはゆらゆらと、主を守るかのように海藻の様に揺らめいている。

「お話はおしまいにしましょう、クウエイヌ」

「その名で呼ぶなど、言つただろう！？」

クウエイヌはカードを取り出した。カードからは黒い影が出てきて、一本の刀になった。

「そう言えば、貴方は日本人とイギリス人のハーフでしたね」

バーク夫人は穏やかに笑いながら、クウエイヌに言った。

「それがどうした」

クウエイヌはそう言つと、バーク夫人に向かって、攻撃を仕掛けた。キンツ、シユンツ。

光のような速さで、バーク夫人を攻める。それをバーク夫人は華麗に防ぐ。失礼にも、歳の割には動きが良い。

「ふふ。若いつて言うのは良いわね。動きがよろしいわ」

「・・・お前もな」

シュヒンツ、キーンツ。

暫くの戦闘が続く。ミシエルとセインはただ見守るばかり。水は自信満々げにその戦闘を見ていた。

「何で、水はそんなに余裕そうなの？」

セインは気になり、水に聞いた。すると、水は笑いながら答えた。

「だって、バークITT様が負けるはずないもん　バーク夫人は強いから」

「うん・・・。そうだね」

ミシエルも頷いた。

カンツ、シュヒンツ。

攻撃は尚も続く。しかし、終わる気配はない。

「クゥエイィィスゥ！」

いきなり、下から声が上がって来たと思ったら、一人の女の子が飛んできて、クウェイイスの前に立った。

「もう、探したんだよ！？リリーがもの凄いい、怒ってたんだから！」

「エミリー！？」

クウェイイスは半ば驚いた様な顔でエミリーを見つめていた。

「帰るよ、クウェイイス！リリーにこっぴどく叱られてもらうからね！」

エミリーはクウェイイスの袖を引つ張った。クウェイイスはエミリーに対して先ほどの態度とからは想像できない非常におどとした態度が目につく。エミリーと言う少女には頭も上がらないらしい。

「だが、まだ続きが・・・」

エミリーにそう呟いた。エミリーはきよとん、とした顔でバーク夫人を見た。

「良いですよ。この続きはまたお会いした時にやりましょう。そこのお嬢さんも急いでいるようですよ？」

バーク夫人はにっこりと笑ってクウェイイスに言った。クウェイイスは

睨んだ後、エミリーに袖をひっぱられた。そして二人の周りを黒い影が覆い、二人は姿を消した。

「うっ……」

バーク夫人がうめき声をあげて、倒れた。

「バーキツト様!!」

水が慌てて、バーク夫人に駆け寄る。

「う……大丈夫よ、水……」

バーク夫人はやっとという感じで返事をした。

セインはこの光景に見覚えがあった。以前、セリアン&ライアン・マルテロナ姉弟と戦った後、ミシエルも倒れたのだ。セインは恐る、水に聞いた。

「ね、ねえ水。もしかして、シンフルアクトで戦った後って、自然と命が削られるの?」

「……!?!?」

ミシエルはセインのその質問に目を見開いた。水は少し、戸惑ったような顔をしてから、バーク夫人の首にある刻印を見せた。

「!?!? 刻印が薄くなっている!?!?」

セインの言っていた通り、バーク夫人の刻印はミシエルに付いている刻印より、少し、薄くなっている。水は静かに言った。そして、ミシエルの刻印も以前より薄くなっていた。

「シンフルアクトを使えば使うほど、『罪人』に付いている刻印は薄くなります。そして、完全に刻印が消えれば……」

「死んでしまう?」

ミシエルは冷静な顔で言った。水は頷いた。ミシエルの横でセインは動揺していた。

(どうしよう。僕がミシエル様のシンフルアクトを使わせてしまえば、ミシエル様のお命が……。僕が許せば……)

セインは焦っていた。これ以上、ミシエルの命を減らしたくは無い。それにいくらミシエルの望みとはいえ、こんな危険な事を止めようとしなかった後悔があった。

「セイン、これは自分が決めた事だから。自分を責めなくて良いよ」  
ミシエルがセインにぽつんと呟いた。セインは自分の心の声が自然と、口に漏れていたのかとミシエルを見つめた。

「セインのそういう顔、いつも見てるからさ」

ミシエルはにっこりと、でも何処か悲しそうな笑顔で言った。

セインはそんな顔を見て、ふと思った。

(何を、今更、後悔してるんだろう？ミシエル様の後ろでずっと自分を責めてばかりで何も変わって無いじゃないか)

セインはミシエルの悲しそうな笑顔の意味が分かった。

(ミシエル様が自分のせいで、僕が自分を責めているのだと勘違いしてるじゃないか)

セインは笑った。

「ミシエル様、僕、大丈夫です」

ミシエルは首を傾げた。セインは言った。

「僕、僕も強くなりますから」

(もう、立ち止まっちゃいけないんだ。ミシエル様の為にも)

ミシエルはその言葉の意味がようやく、分かったらしく笑った。

僕は立ち止まらない。

そんな強い意志を胸に秘め、強くなる事を心に誓ったのであった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2477z/>

---

赤い道化師の箱

2011年12月26日23時54分発行